

寶月誠教授退官記念号によせて

松 田 素 二

この『京都社会学年報』第12号は、2005年3月をもって文学研究科・文学部をご退官される寶月誠先生の学恩に感謝し記念する特集号として刊行されたものです。京都大学社会学研究室的の教員と院生を母体とする『年報』は、1994年3月に創刊されました。この雑誌の生みの親となったのが寶月先生でした。大学院生に論文執筆の機会をより多く与えたいという実的な意図ももちろんありましたが、先生は、細かくマニュアル化され作法も標準化された既成の学術雑誌の枠を超えて、自由な発想と時にはやんちゃな実験ができる場として『年報』発刊の必要性を強く主張されました。そして、当時の助手や院生のみなさんの献身的な協力もあって、『年報』は産声をあげたのでした。こうして生まれた『年報』は、大所帯となった大学院生が互いに研鑽するフォーラムとして、また自分の荒削りではあるけれどもオリジナルな発想を磨く実験室として、号を重ねてきました。今号では、寶月先生の最後の一年間、博士論文の指導を受けた院生、研修生をはじめ、研究室の同僚・後輩が先生に感謝の気持ちをこめて寄稿しています。

寶月先生は、教育学部をご卒業後、三重高等学校で社会科の教員として勤務されました。そして社会学の魅力に惹かれ、教職を辞して文学研究科に入学、その後、大阪府立大学で11年間教鞭をとられ、1980年4月に京都大学文学部に赴任して来られました。以来、25年の長きにわたって、社会学研究室的の支柱となって数多くの学生に社会学の魅力を伝え社会に送り出すと同時に多くの優秀な研究者を育て上げて来られました。この間、教育者、研究者として一般のご活躍をされるだけでなく、各種の学会や社会活動においても指導的な役割を果たされてきました。先生ご自身は、どちらかといえばこうした活動はお好きではないタイプですが、穏やかなお人柄と公明正大な人間力のためか、多くの役職を依頼されそれぞれの領域で多大な貢献をされてきました。

寶月先生は講義や演習などにおいて、一貫して経験的研究の重要性となまの社会的な事象との距離感を強調されてきました。一方で象徴的相互作用論をベースにした豊饒な理論的世界に磨きをかけながら、他方で、逸脱、非行、企業犯罪といった現実の経験世界を見据える地点に立つというスタンスは、寶月社会学の真骨頂と言えるもので、多くの研究者や大学院生を惹きつけてきました。こうした経験世界とそれに対する社会からの多元的なコ

ントロールという研究枠組を樹立した先生は、現在の日本社会学における逸脱と統制研究の基礎をつくりあげたといっても過言ではないでしょう。先生の著作は、社会学者だけではなく犯罪、医療、司法の第一線の現場で活躍する専門家に対しても、大きな影響力を与えています。

今日の大学、とりわけ社会学をとりまく状況は激しく流動しています。本研究室においても1996年に大学院が重点化され、大学院生の数は倍増しました。また課程博士コース修了後、博士論文を提出することが当たり前になってきています。2004年には国立大学が独立法人化され、予算の執行方法やカリキュラムの編成も大きく変わりました。来年は文学部の創立100年も迎えます。こうした時代の大きな区切りの時期に、それに見合った組織や制度の改革の必要性を訴え、研究室改革の先頭にたってくださったのが寶月先生でした。また先生は多様な関心を抱く院生や学生に社会学の楽しさと厳しさを教えてくれました。ときに厳しく叱咤される一方で、研究の問題点を優しく指摘し適切なアドバイスを与える先生のおかげで、学生、院生はつねに一段高い目標へとチャレンジできるようになりました。

寶月先生は、21世紀の京大社会学の土台を設計し基礎工事を無事完了させたと言ってよいでしょう。たしかに少人数のスタッフで幅広い研究テーマを抱える院生集団を指導し、社会学教室を運営発展させていくことは至難の業です。しかしながら、先生が身をもって示してくださった、問題点を根源的にさぐる力と、公明正大にものごとを処理する力を少しでも身につけ、前進していきたいと思います。

先生がこの時期にご退官されることは、社会学研究室一同たいへん残念なことです。これまで先生から得た数々のご恩に対して、心から感謝の意を表すとともに、この特集号を先生に捧げさせていただきます。



寶月 誠 教授